祖父のライフワーク“伝道”

92K029　稲垣美穂

祖父のライフワークは伝道である。

伝道に命をかけ、若い日より音楽（パイプオルガン）に夢をかけた。

1911年11月11日、長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢596に生まれる。７人兄弟の末っ子で、守臣（モリト）と名づけられた。軽井沢村立小学校を出た後、京都、私立同志社中学へ行き、親と離れ寮生活をする。その後宗教音楽に興味を持ち、私立同志社大学文学部神学科へ進む。大学四年の時、病気にかかり、入院した時に牧師（伝道）の道を進みなさいという神の声を聞き、牧師になることを決心する。大学に七年行き、1939年、神戸教会の伝道師に就任（伝道師というのは牧師の卵である）。翌1940年、岡山旭東（キョクトウ）教会の牧師を勤めた後、1941年、今のつれあいである睦子（ムツコ）と結婚し、東京麻布教会牧師に就任。1945年に戦災にあい、教会堂を消失した。第二次世界大戦では、丙種合格で戦地には行かなかった。戦時中は動員され、大日本印刷、石けん工場、朝日新聞社で働いた。1945年、東京渋谷に教会を復興し、聖ケ丘（ヒジリガオカ）教会と命名。パイプオルガンを設置した。1978年、茨城の筑波学園都市に開拓伝道をした。筑波学園教会と命名。（開拓伝道とは、まだ教会もなくキリスト教の広まっていない土地に教会を建て伝道を始めることである。）パイプオルガンを設置した。1988年に78才にして教会の仕事を引退し、第一線から退いた。長野県北佐久郡軽井沢町追分に居住。聖ケ丘教会と筑波学園教会の名誉牧師、桜美林大学の理事として伝道を続けている。1993年７月、追分の地に軽井沢追分伝道所を建て、パイプオルガンを設置。宗教音楽に興味を持つ祖父は、教会音楽に適しているパイプオルガンに夢をかけ、それぞれの教会と自宅にパイプオルガンを設置した。四人の子供のうち長男である私の父が牧師となり伝道の道を進む。このことは祖父にとってとてもうれしいことだった。最後の大きな仕事であった、追分伝道所は、父に続けて欲しいようである。ライフワークである伝道が自分の息子へ伝わり、その息子が祖父と同じライフワークを持ったのである。父のライフワークも祖父と同じ伝道であり、教会、幼稚園、社会問題などを通して伝道に励んでいる。伝道に携わっている人はたくさんいる。教会を通して伝道する人はたくさんいるが、それぞれにいろいろな方法を見出している。牧師という仕事は給料が少ない。金もうけの仕事ではないから、生活するのも大変である。祖父は、引退してから、軽井沢の親から相続した土地をやりくりして、今の生活を成り立たせている。そして人生の終わりも近い82才にして居住地の追分に教会堂を建て、パイプオルガンを据えて、伝道に励んでいる。宗教音楽、パイプオルガンをとおして、たくさんの人が追分の教会堂を訪れ、神を知り、神の国の完成に一歩近づく。祖父の家は神を信じる者と音楽にあふれ、私は祖父の家へ行くと音を奏でたくなる。私は今チャペルでオルガンの奏楽のお手伝いをさせてもらっている。今は失敗ばかりだがそのうち上手になって、私の奏でる音楽で、神を知ってもらえるような、きっかけになるような演奏をしたい。祖父は、引退しても伝道をやめず、死ぬまで絶えず伝道をやめないという。軽井沢の家にはいつもお客が訪れ、笑いが絶えない。祖父と祖母はいつも忙しいと言う。笑顔でそういうのだから

たまらない。忙しい、がうれしい、と聞こえるようだ。祖父は自分が幸せだという。まわりの人も皆、祖父の事を幸せだという。私もそう思う。祖父の故郷の軽井沢に、長年つれそった愛妻と、教会堂とパイプオルガンがある。その地は祖父の夢そのものである。

私は祖父の話を聞いて、幸せを感じていた。それは何かを超えた幸せだ。祖父は幸せしか語らないのである。生まれた時からの話は全て幸せなのである。私は“大変だった？”と聞いても“大変だったよ”としか言わない。幸せという字は、辛いという字と似ている。幸せと辛いのは背中合わせなのかもしれない。

私なりに祖父のつらかった時の事を、考えてみた。まず、中学での寮生活である。長野と京都だから一年に一度程しか家へ帰ることはできなかっただろう。そうして、病気と闘った大学生活。神戸、岡山、東京と知らない土地での慣れない、始めての伝道。そして第二次世界大戦。戦地に行かなくて、祖父は幸せ者だ。戦争に行っていたら、人を殺すという行為をしなければならなかっただろう。話によると、戦争に行った牧師が、人に向けて銃を発砲できず、空に向けて打ったという。戦争に行っていたら、牧師という職業の中で、つらい思いをするだろう。三ヵ月程前に私は、沖縄に行った。そこでは戦争の跡をひきずり今だに戦っている。戦争に携わった人々はあまりそのことに触れたくないらしい。自分が赤ちゃんや老人（身内）を殺したという事実。天皇に対する憎しみ。愛する者を亡くした悲しみ。そして自分の受けた苦しみ、つらさ。そういう所に触れた時、恐くてたまらない。祖父は本当に幸せだと思う。戦争は全ての人の人生を変えてしまったものだから。祖父はこの幸せを神に感謝してやまないことだろう。そしておそらく祖父の人生の中で一番輝かしく、つらく、大変な時が、これからの三つの教会を建てた時だろう。教会堂を建てるにはもちろんお金がかかる。その上パイプオルガンまで設置したのだから。聖ケ丘教会というのはとても大きな教会である。大きいというのは、人数が多いということで、規模が大きくなると問題も大きなものとなる。アメリカやイギリスなどは、牧師という職業はいろいろな意味において尊重されている。しかし日本では、キリスト教すら広まっていないのだから、その中での伝道は良いように言えば、やりがいのある、悪いように言えば、骨の折れる仕事だ。金もうけの仕事でもなければ、学問でもない。生きた人の心を扱うのだ。扱うというのは少しニュアンスが違うようだが、精神的な面を扱う仕事、なのだ。よく“私、死にたいんです”とか“助けて!!”とかそういう電話がかかってくる。彼らを救えるかどうかは牧師にかかっている。うまくいかず、救えなかった時もあるのだろう。そういう時は本当につらいのだ。筑波への開拓伝道は祖父の一番大きな仕事だ。つくば万博以前の筑波は、何もなかったのである。開拓伝道は牧師が自分の力だけでできるので自分の力がためせるの所だ。しかしそれだけ自分の力が至らなかった所が返ってくるのだから大変だ。今は筑波学園教会も大きな教会になり、祖父の力のすごさを感じる。引退した今でも伝道は続けている。いつも何かとしていないとだめらしい。いつも動いている。祖父は今、病気の老人に伝道している。死を目然にしたその老人は、祖父の助けによって神を知り、生きることの素晴らしさを知って受洗を決意した。牧師というのは神を知るほんの助け手である。祖父の牧師、伝道人生の中で、まちがいはたくさんあっただろう。貧困の中で苦労しただろう。父は子供の頃、お腹がすいて、金魚を焼いて食べてみたことがあるそうだ。とても食べられたものではなかったそうだが、そのくらい貧しかったということだ。今では、たくさんのお客であふれる笑顔がいっぱいの軽井沢で裕福に暮らしている。祖父にはつれあいと四人の子供とそのつれあいが四人。そして十二人の孫がいる。皆が教会につながっている。とても仲の良い一族で、夏休みとお正月の二回、

一年に二回一族が集まる。そのような時の祖父は笑い顔で顔がぐちゃぐちゃになってしまう。パイプオルガンのある家に子供達が集まる。一人の孫が音楽大学のオルガン科でパイプオルガンを習っている。彼女が祖父の家を訪れると祖父はいつもオルガンをひかせる。私はオルガンをうまくひけないので庭そうじをする。祖父は追分の教会堂を建ててから、仕事を終えて、暇だそうだ。何かをしていないと気がすまない性格の祖父はいつもすることを探している。だから一緒に庭いじりをするのだ。最近年を感じるようになったのだろう。自分で“人生の終わりに近い82才”と言う。祖父程幸せそうな人を私は知らない。祖父より苦労した人は星の数程いるだろう。祖父の苦労はたいしたことはないのかもしれない。祖父より幸せな人もたくさんいるのかもしれない。しかし、幸せを語る老人が私の祖父でよかった。伝道一筋で若い頃よりそれだけに命をかけ、神の下僕として神の国の完成のために生き、今は神の国に到達する道を探っている。その道は平安に至る道で今まで苦労をかけた祖母とずっと一緒である。牧師の家庭というのは牧師夫人が教会を見えない所で支えその上に牧師が立ち、子供が笑みをたやさない。母が縁の下の力持ちだ。私はこのレポートを書くことによって祖父と祖母に対する気持ちが変わった。祖父と祖母がいつか死んでしまうのが恐くてたまらなかった。そう思うと足が軽井沢に向いていた。今は、幸せな祖父の夢の家へ行きたくてたまらない。

私が年をとって、孫にライフワークを聞かれた時、祖父のように幸せな人生を語りたい。きれいごとかもしれない。しかし人間というものはぐちの方が多いものだ。幸せな人生を語る方が苦労話をするよりもけっこう難かしいのかもしれない。